

聖家族の祝日

2013年12月29日9:30 ミサ

オリビエ・シェガレ

(パリミッション会司祭)

マタイ2・13-15、19-23

2000年前に生まれたイエスの誕生以来、たくさんの画家が聖家族を描いてみた。我が子のゆりかごを揺らす母マリア、陰に隠れて大工の仕事に励んでいるヨゼフ、目をつぶって静かに眠る子の姿。絵には、それぞれの時代の家族の理想が反映されています。家族の団欒、母の優しさ、夫の協力、夫婦の愛情、親子の信頼関係。長い間、聖家族は家族の理想のように考えられました。しかし実際の聖家族を取り巻いていた状況は決してバラ色ではありませんでした。政治的な圧迫、貧しい者の抑圧、宗教による差別。マリアは子の将来を心配しています。大工のヨゼフは仕事に追われているせいか、聖書にはほとんど姿を表していません。悪いこのような環境の中でも、イエスが生まれ育ち、父と母の深い配慮を受け、ルカの福音書の記録によると「知恵が増し、背丈が伸び、神と人に愛された」。この愛はどの子供にとってもどれほど大切なものかと思えます。イエスは、親の愛を知っていなかったならば果たして愛そのものを伝えることができたのだろうか。やがてイエスは当時の学校であったシナゴグに通い、厳しい律法教育を受けなければならず、仲間ができ、家に居ることが少なくなります。すべての母と同様、家事に追われて、厳しい家庭の現実に向き合っているマリアの心には時々孤独、時々迷いや不安があったに違いありません。

聖書によると、聖家族の親子関係は必ずしも円満であったとはかぎりませんでした。ヨゼフとマリアが息子の行動を理解できなかったことはたびたび記録されています。イエスは、すべての子供のように親のもとから離れ、自分自身の道を歩みたい。どの家族でも子供の行方は親の期待通りになるとはかぎらず、親の思いは子の思いと必ずしも一致していません。このことを悟った時、やはり親の心が痛みます。しかし、それが神の思いであるなら、それを受け止めて、子を棄てないで子を見守っていきます。これは親の心、親の使命、マリアとヨゼフの一貫した姿勢であったように思います。

結局のところ、神の祝福を受けた聖家族とはいえ、イエスの家族は決して理想通りに行かず、様々な葛藤や困難を乗り越えなければならなかったでしょう。それを乗り越えさせてくれた力は信仰であったに違いがありません。今日の箇所ではヨゼフの信仰は従順として物語られています。「ヨセフが起きて、夜のうちに幼子とその母をつれてエジプトへ去った」と、ヨセフはためらわずに天使の

指示に応じたということです。神様の思いはなかなか理解できないが、従えば神の計画は預言者が予言したように成就するに違いありません。これはヨセフの信仰、神の民の信仰でした。マリアの信仰も、委ねる姿勢として「お言葉どおりこの身になりますように」という言葉にいつも表されています。イエスの信仰は全ての子供のように家から伝わったものであったが、それに甘えず親の思いを超えた神の呼びかけに応えようとして、自分自身の信仰が成熟したものとなる。「わたしが自分の父の家にいるということを知らなかったのか」と、12才の時に家出をしたイエスの言葉の中に、ちょっとした親への反抗心が込められていたが、マリアはその反抗心を心に留めていて、思い巡らしていたと聖書は言っています。

信仰と愛。イエスの家族は大変な状況の中におかれても、パウロの書簡の中にあるように神から愛されていることを知っていて、憐れみの心、謙遜、柔和、寛容を身につけ、互いに忍び合い、ゆるし合いによって全てを完成させる愛の絆によって結ばれています。

今日は、聖家族の光に照らし合わせて、厳しい現代社会を生きる日本の家族、我が家庭のあり方を静かに見直すことができます。

日本の家庭を取り巻く状況はイエスの時のそれとあまり変わらず、決して甘いものではありません。激しい経済競争、教育の危機、モラルの退廃、いじめと差別などの多い時代。その状況の中で日本の家族はいろいろな点で苦しい状況に直面しなければなりません。

少子高齢化が進む中、若いお母さんの孤独、残業や単身赴任のための父の不在、過保護の母に対する娘の反抗、甘やかされた息子の我がまま、介護の負担、家庭内のコミュニケーションの無さ、世代間の断絶がよく指摘されます。皆が忙しくてゆっくり交わりの時間を取れません。お父さんの仕事、娘の習い事、息子のクラブ活動、お母さんのボランティア、皆忙しくて家族として共有できる時間や空間はどんどん減っています。家の中に各自が自分の小さなお城を作り、家に帰ってもそれぞれの自分の部屋に閉じこもってパソコンに夢中になったりして、食事の時にテレビやスマートフォンの画面にしか目を向けない。同じ屋根の下にいても出会いがありません。家の空洞化の現象は現代の特徴かもしれない。それでも希望のしるしがたくさんあります。育児に協力するパパが増えます。互いの誕生日を祝いしています。祭日は家族ぐるみのドライブが流行っていますとか。社会調査の報告によれば若者にとって最も大切なことは家族と言います。こうした希望のしるしを大事に見分けながら、マリアとヨセフの信仰と愛にしっかり倣っていけば、家庭の問題は乗り越えられると思います。

現代家庭の変化、その多様化と空洞化は、日本だけではなく世界中の国が経験しています。そのために教皇様は来年、家庭をテーマに、シノドスを開きたいとおっしゃっています。全世界の人々の知恵を集めたら、きっとこうした変化への良い対応の方法が見つかります。

口先の議論だけではなく、ヨセフとマリアの信仰と愛は私たちと全世界の人々の家庭を救う大きな光りとなっています。自分の思いだけではなく、神の思いを大切に、神の計画の実現を願い祈ること、どんなに厳しい状況の中でも神が共にいてくださっているという信仰は大切です。神の目からすれば、信仰と愛に生きる全ての家族は聖家族であり、神が守ってくれるに違いありません。ヨセフとマリアのようにいたわり合い、協力し合いながら、ゆるし合い、互いの愛を確認し合い、我が家の上に神の祝福を祈りたいと思います。